

## 2022年2月学習会 第36回「資本論を読む会」

日時：2月28日（月）午後6時30分～  
Zoomで開催しています

「第13章 機械装置と大工業 第2節  
生産物にたいする機械装置の価値移転」  
※第1節の後半部分を討議後に入ります。

今年初めての1月24日「資本論を読む会」には10人が参加(地方は3人)。「第1節・機械装置の発達」を読み合わせして討論しましたが、時間の関係で、今回は半分だけ(336pまで)で終わりました。次回は、第1節の残り半分の討論をしてから「第2節・生産物にたいする機械装置の価値移転」に入ります。

今回は、内容的にはマルクスの概念論ではなく、いわば機械装置の歴史・実態論ですから、概念論議のような、頭が痛くなるような難解さはありませんでしたが、当時の機械発達の実態が細かく説明されていて、これが分かりにくかったかも？ 討論では林野の仲間から林業機械の進歩・実態について報告があり意見交換。

自主懇親会では、今回はチョット本題から離れて、「レーニンの秘密」からロシア革命、マルクス・レーニン主義評価等と、少し古典的なテーマに入り込みました。お開きは11時半頃かな。

次回からも初参加の方歓迎します！別途お送りするZoomアドレスからお入りください。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから--Tak

### 第四編 相対的剰余価値の生産 第十三章 機械装置と大工業 第一節 機械装置の発達

○資本主義での機械装置の目的は「人間の労苦の軽減」ではなく、労働生産力のすべての他の発展と同様に「商品を低廉にすること」。機械装置は剰余価値生産のための手段である。

第一に、労働手段の「機械と手工用具との区別は何か」が問題。

○機械装置は「三つの本質的構成部分」、①動力機②配力機構(伝導機)③道具機・作業機、から成る。機械装置の「道具機」こそ産業革命の出発点である。

○道具機とは、運動が伝えられれば、類似の道具で「労働者が行ったと同じ作業を行う」一つの機構。

原動力ではなく、「本来の道具が人間から一つの機構に移された」とき、道具に代わって機械が現れる。

道具機が動かす道具の数は、「労働者の手工道具を制限する有機体的限度(手や足の数等)」から、初めて解放されている。

○産業革命は第一に手工用具の「手の部分」を襲う。これに反して、人間が単純な動力として働きかける足の道具は、ずっと以前から、動物・水・風が応用されるが「生産様式を変革しない」。

<小結論> 「産業革命が出発する機械」は、①個々の道具を扱う労働者の代わりに、一時に多数の同一・同種の道具で「作業」する機構、②形態(人間か自然力か等)を問わず、「単一の動力」で動かされる機構、を持つ。これが「機械の出現」だが、未だ「機械的生産の単純な要素」としてにすぎない。

○「作業機の生産能力の増大」が「より強力な動力」を必要とし、ワットの複動蒸気機関が初めて、「自らその動力を生み出す」。～産業革命は、作業機から始まるが、その後に動力機でも起こる。

・人間は、「均等な連続的運動」には極めて「不完全」で、より強力な動力用具の「抵抗」に勝てない。

・自然の動力では、馬は最悪で「頭(精神状態)」があり・再生産費が掛かり・工場内の利用可能範囲が限定的。風はあまりに不安定で「統御」し難い。水力の使用が盛んだが、力を任意に高められず不足を補えない・枯渇する・利用場所は「水力を持つ土地」に限定される、という困難がある。

○「ワットの複動蒸気機関」は、その力が全く「人間の統御」に服し、①技術学的応用が「普遍的」(どの生産にも利用可能)であり、②所在地の局地的事情に整約されない、最初の原動機だった。

<小結論> 道具が道具機の道具に転化した後、「動力機」もまた、「人間力の制限から完全に解放」されて独立する。と同時に、道具機は「機械による生産」の単なる一要素に転落する。(336P)

次は 第2節 生産物に対する  
機械装置の価値移転

